

随 想

良い英文を書くために
— 英文校閲者のつぶやき —

西 川 治*

外国語を身につけるには、その言葉が話されている土地に住むのが一番であると言われる。ところで、外国に長く住んだからとてその国の言葉に上達するものでもなさそうだ。私も米国に長年住み、それも日本人の少ない山の中の大学町ですごしたのだから英語はペラペラと人には思われているようだが、これは大変な誤解であつて、外的条件のみで外国語が身につくのではない。また、日本に生まれ育つたすべての人が日本語をうまくしゃべれるとは限らないことも真であつて、「アイウエオ首相」と「黒柳徹子」とを比べていただきたい。更に、TVに出演する外人講師の見事な日本語を耳にすると、在米中の言葉による不愉快な経験が思い出され情なくなる。特に身にしみて思い出されるのは、ドイツ生まれの恩師が私の原稿を読んで、“How long have you been here?”とあきれていた顔である。

英語が身につかなかつた理由の第一は私に才能がないことであつて、これは仕方がない。第二は恵まれた環境を生かす努力をしなかつたことである。私の原稿を同僚や大学院生が寄つてたかつて元の文が残らぬ程丁寧に直してくれ、それを読んで「フーン」と感心してすませていたのだから、上達を期待する方がおかしい。

この私が帰国すると、さつそく鉄鋼協会から英文誌の校閲をしてもらえないかとお話があつた。協会としては私の滞米期間の長さから判断されたようであるが、無責任にもこの申し出を引き受けた罪は私にある。私は、最近の日本人研究者の海外での活躍ぶり、そして帰国後初めて立ち合つた入試で英語の難問をやすやすと解いて行く受験生を目のあたりにしていたので、日本人の語学力は相当なものだと判断したのである。一般に、私達理工系の者が書く論文英語は高校英語よりやさしく、限られた構文の繰り返しであるから、私の校閲者としての仕事はミスタイプを見つけるくらいでよいのではないかと気楽に引き受けたのである。

ところが、送られてきた論文を拝見して私の予想が大きくはずれている場合が多く大変驚き慌てたが、今更じたびたしても始まらない。そこで、私はこの機会を利用して泥縄式の勉強をすることにした。まず手始めに、研

究社の新英和大辞典、新和英大辞典、新英和活用大辞典そして Webster's New Dictionary of Synonyms を買いそろえた。協会から支給された日本物理学会の「Journal の論文をよくするために」も読ませていただいた。

こうして曲がりなりにも校閲を続けている間に気のついたことは、構文の間違いとかミススペルの極めて少ないことである（入試勉強の賜物か）。それより一番問題となるのは、英文からでは著者の言わんとしている点を理解できないことである。こうした問題を避けるために英文論文にはその基となる邦文論文が添えられているが、両論文の間の対応があまりよくない場合も多い。また、対応している場合でも、私が英文より得られる点と邦文の意味するものとが合わなかつたり、全く文意をつかめないこともしばしばある。こうした場合、私達日本人は何となく分かるような気になりがちだが、外人の目には全くチンプンカンプンであろうから、私達校閲者はこうした点にも注意を払わなければならない。

ここで日本的発想の英文例を二、三挙げてみる。日本文「圧延板から丸棒試験片を加工する場合を考えると、試験片の横断面に延伸粒が存在する確率はL断面よりT断面の方が高く、この差がL、T方向延性で見掛け上異方性が現れる原因と思われる」に対して英訳文は Considering to machine the round specimen from the rolled plate, the probability to exist the elongated grains on the specimen section is higher on T section than on L section, of which difference is considered to be the reason why the anisotropy in ductility appears.

となつている。「……加工する場合を考えると、…」の「考える」と、日本語でよく使われる受身の「思われる」に引きずられて読みにくい文章になつている。この文を A round specimen cut from a rolled plate exhibits more elongated grains on T section than on L section. The difference may reflect the anisotropy in ductility.

と書きかえると、私にはよく分かるのだが…。次の文も日本語に引きずられた跡がはつきりしている。原文は

* 東京工業大学大学院助教授

「著者らは鋼の強靱化を目的とし、まず組織と機械的性質との関連を検討し、強度、延性、靱性の優れた組み合わせを得るには加工熱処理の適用が有効であることを示した。」であり、この文に対応する英文は

In order to obtain the excellent combination of strength, ductility and toughness in ultrahigh strength steels, it has been shown that the application of thermomechanical treatments is highly effective from the experiment on the effect of microstructure on mechanical properties.

となつている。この文では原文の「目的とし」を in order to としたため、the experiment の行き場がなくなり effective from the experiment という分かりにくい文になつている。私達には何となく理解できて英米人にはどうであろう。これを私なりに下のように書きかえてみた。

The experiment on the effect of microstructure on mechanical properties has shown that the application of thermomechanical treatments is highly effective in obtaining an excellent combination of strength, ductility and toughness in ultrahigh strength steels.

最後の例の日本語は、「ASTM 規格では、すべての熱処理後に疲労亀裂を挿入することが規定されているので、本実験では時効処理後に疲労亀裂を挿入した。」である。英文の方は、

As the fatigue cracking is recommended to conduct for the specimen fully heat treated in ASTM specification, it was conducted after aging in the present study.

となつている。この文で意味のとれないのは to conduct for と、in ASTM specification、そして it was conducted の it と conducted と上の conduct との関係等で何となくすつきりしない。そこで私は原文をにらみながら

As the ASTM specification recommends to fatigue crack the specimen after full heat treatment, the specimen was cracked after aging in the present study.

と書いてみた。

ところで、最も頭の痛いのは冠詞である。冠詞の使い方はいくら人に教わつてもよく分からないというのが本音である。私の友人達は声をあげて私の原稿を読み、流れが悪いとかここで引つ掛かるといつては訂正してくれたが、冠詞の場合は、明白なものを除くと、口調によつて決めていた。ということは、もう一人の友人に直してもらおうと、また書き直されることもあるわけで、私としては何とも手のつけようがない。ところで、私が弱るのはもつと明白な場合であつて、例えば、The recrystallized structure is found to be... という文に Such a

microstructure is produced by... という文が続く場合等である。microstructure が recrystallized structure を受けていることはわかるが、限定的な意味であれば The microstructure であるし、より普遍的な意味であると Such microstructures are... とした方がよい。この辺のところは原文を続んでもはつきりしないことが多く、迷わされる。

以上、取りとめもないことを書き綴ってきたが、ここで校閲者として著者への願ひがある。その第1は、辞典を頻繁に活用することである。それは、文章を正確に伝えるには不適切な単語や、少しニュアンスの異なる単語が用いられている場合が多いからである。校閲者としては、筆者の文体とか持味とかを残すために意味が汲み取れる限り元の文のままにしておきたいが、そうもいなくて迷うこともしばしばである。例えば、「急な」という語に対し rapid が使われていることがある。運動の早さの場合はこれでよいが、測定量の予期せぬ変化であるとき、sudden とか abrupt の方がよい。適切な語の選択は英語または和英の一つだけを用いて訳語を選び出すだけではなく、sudden を英和でひいて「急な」という訳語を見出せば、和英で再び「急な」をひき、用例を調べて確認することをお勧めする。これでも納得できなければ活用辞典とか同義語辞典も参照すること。大変手間はかかるが、あの入試を突破し、多くの難論文を読みこなして来た才能ある著者のことである。この努力を続ければ、短い期間に英語に強くなること間違いない。

今一つの願ひは、でき上がった英文に和訳文をつけることである。現在、英文論文にはその基となる和文論文が添えられて私の方へ送られて来るが、先に述べたように両論文の間の対応性が低かつたり、文意の一致しない場合が多い。また、著者も原文に忠実たらしめて無理をする不便さもある。こうした難点を取り除くために、和文論文から一応切り離して自由に英文を書き、それを著者が和文に訳して英文に添えて投稿していただきたいのである。メリットは校閲者のみではなく、著者にも自分の英文を見直すという点がある。また、和訳に際しては、英文では自分の意図をうまく書き表せなかつたと思える箇所は、和文の方に正確にわかりやすく書き込み、その箇所にアンダーラインを引くことである。私ではあまりお役に立たないが、立派な校閲者が多いので著者の意を汲み適確に校閲されることと思う。

いずれにしても、よい英文が書けるかどうかは著者の努力次第である。努力しなければ、いくら恵まれた環境にあつても上達しないことは私自身が何よりの証拠である。こう考えると、優れた校閲者をそろえるということとは恵まれた環境をもたらしことになるのだと気がついた。私を校閲者に選んだ鉄鋼協会の真の意図は、投稿者に悪例を示し、より一層の努力を促すためであつたのか。